

## Psychiatry and Clinical Neurosciences

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 75 (2) は, PCN Frontier Review が 1 本, Regular Article が 2 本掲載されている。国内の論文は著者による日本語抄録を, 海外の論文は PCN 編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する。

### PCN Frontier Review

What COVID-19 tells us about the self : The deep intersubjective and cultural layers of our brain

A. Scalabrini\*, J. Xu and G. Northoff

\*Department of Psychological Health and Territorial Sciences (DiSPuTer), G. d'Annunzio University of Chieti-Pescara, Chieti, Italy

COVID-19 により自己について明らかにされること : 間主観性および文化にかかわる脳深層

COVID-19 による危機は, われわれの自己意識, さらにはわれわれの実存的恐怖に影響を及ぼしている。他人から感染することも, 他人に感染させることもあるため, 自他関係にも影響する。このパンデミック危機は, われわれの自己と他者との関係性, その文化的相違, これらが脳と外界との関係にどう根差しているのかについて, われわれに何を告げているのか。最初に, 自己および自他関係の心理学的および神経科学的特徴と, これらの特徴が脳の認知にかかわる表層を補完する脳神経活動の深層にどう根差しているのかを考察する。次に, 自己の概念に関する東洋と西洋の文化的相違 (すなわち, 独立および相互依存) と, その相違が脳の神経-社会的および神経-生態学的整合性の現れにどう反映されるかを示す。最後に, COVID-19 による危機のなかでの, 自己と自己表出の間主観性とその文化的性質に焦点をあてる。脳が社会的状況と生態学的環境の両方で

緊密な整合性を保つことを示したさまざまな経験データについて考察した結果, 神経-社会的処理軸と神経-生態学的処理軸は脳深層レベルで連続体をなすという仮説が裏づけられた。このことから, 神経-社会的-生態学および心理学的レベルによる自己の二段階モデルが導かれる。本モデルは, 過去に示唆された自己特異性基盤モデル (basis model of self-specificity) を拡大するものである。結論として, 現下のパンデミックにより間主観性と文化にかかわる自己と脳両方の深層の重要性が示された。そして, その重要性を無視すれば, 自己と他人の生命を脅かす可能性があり, 逆説的ではあるが, 自由および独立に関する自己意識は増大するどころか, 低下するだろう。

### Regular Article

Age-related white matter changes revealed by a whole-brain fiber-tracking method in bipolar disorder compared to major depressive disorder and healthy controls

Y. Masuda\*, G. Okada, M. Takamura, C. Shibasaki, A. Yoshino, S. Yokoyama, N. Ichikawa, S. Okuhata, T. Kobayashi, S. Yamawaki and Y. Okamoto

\*Department of Psychiatry and Neuroscience, Hiroshima University, Hiroshima, Japan

全脳線維追跡法を用いた年齢に関連した白質構造変化の双極性障害, 大うつ病性障害, 健常対照群間での比較

【目的】双極性障害の年齢に関連した白質統合性の変化についての報告が散見されるが, それが疾患特異的な変化か否かについては明らかになっていない。われわれは大うつ病性障害, 双極性障害, 健常対照群間で白質統合性における, 年齢の影響を除いた疾患による変化, 年齢の影響および年齢-群交相互作用を

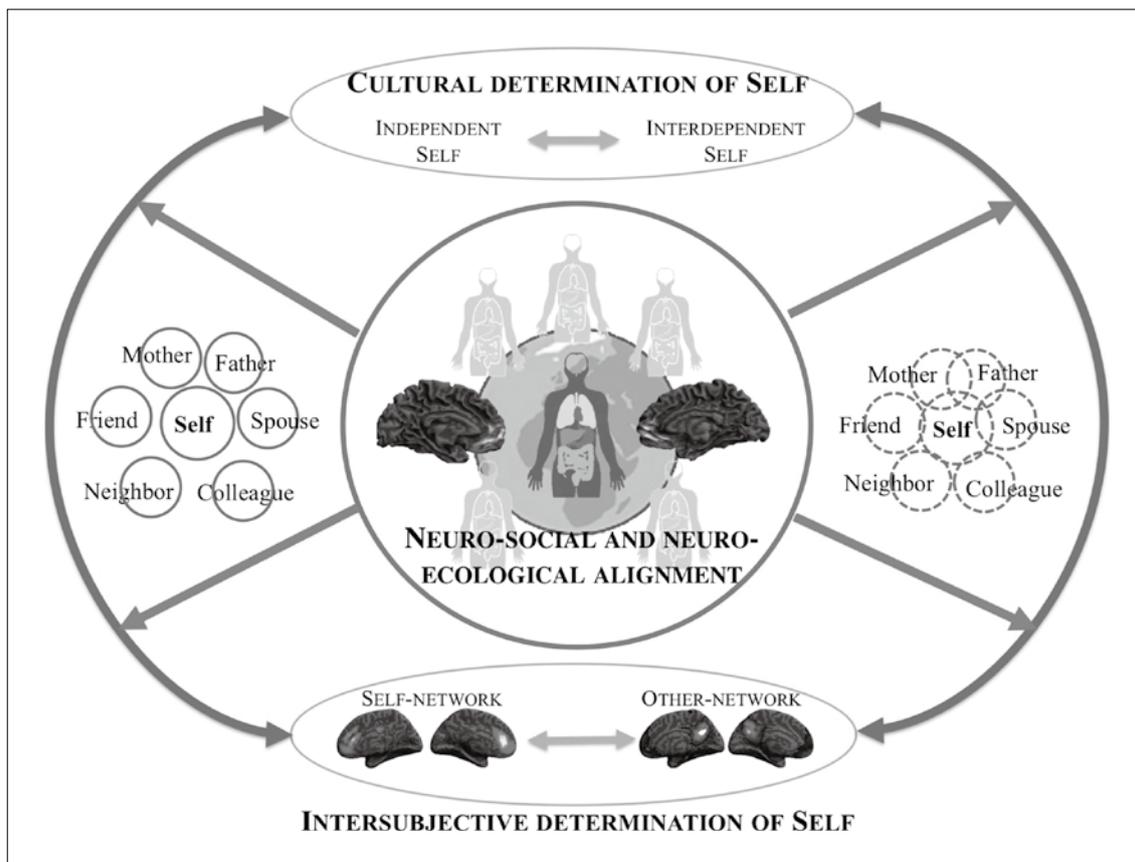


Figure 2 From the brain's neuro-social and neuro-ecological alignment to cultural differences of self (出典：同論文, p.40)

評価した。【方法】健常対照群（96名，20～77歳），大うつ病性障害患者（101名，25～78歳），双極性障害患者（58名，22～76歳）が研究に参加した。拡散テンソル画像で得られた54領域に区分された大脳白質のFA（fractional anisotropy）値を，一般化線形モデルを用いて，一次関数および二次関数でモデル化した年齢で調整して比較した。さらに年齢の効果，年齢-群交互作用についても検定を行った。【結果】群の主効果が，一次関数および二次関数モデル化した年齢で調整後に左脳弓体/柱において，二次関数モデル化した年齢で調整後に左脳梁体部において認められた。双極性障害患者は他の群に比較し，有意にFA値が低下していた。年齢-群交互作用はいずれの領域にも認めなかった。【結論】双極性障害では年齢の効果を除いた場合にもFA値低下が明らかであり，双極性障害の白質統合性の低下は加齢とともに進行するのではなく，若年からすでに存在している可能性が示唆された。

## Regular Article

Efficacy and safety of tipepidine as adjunctive therapy in major depressive disorder : A randomized, double-blind, placebo-controlled clinical trial

S. Hoobehfekr\*, H. S. Moghaddam, M. Shalbafan, M. G. Hashemi, M. M. Pirmoradi, A. Sakenian, A. Poopak, S. Kashefinejad, M. Yarahmadi and S. Akhondzadeh

\*Psychiatric Research Center, Roozbeh Hospital, Tehran University of Medical Sciences, Tehran, Iran

大うつ病性障害における補助療法としてのチペピジンの有効性および安全性：無作為化二重盲検プラセボ対照臨床試験

【目的】非オピオイドの合成去痰薬であるチペピジンは，うつ病の動物モデルにおいて，うつ病様行動を改善することが示されている。本試験では，大うつ病性障害（major depressive disorder : MDD）の治療におけるチペピジンとシタロプラムとの併用療法の有効性および忍容性を評価した。【方法】無作為化二

重盲検プラセボ対照臨床試験を実施し、MDD患者62名をシタロプラム（最大40 mg/日）+プラセボ、またはシタロプラム+チペピジン（30 mgを1日2回）の2つの並行群のいずれかに割り付け、6週間の投与を行った。ベースライン、第2週、第4週、第6週に患者のハミルトンうつ病評価尺度（Hamilton Rating Scale for depression : HAM-D）を評価した。【結果】56名が本試験を終了した。チペピジン群のHAM-Dスコアは、ベースラインから試験中の3つの測定時点までのいずれの期間においても、より高い改善を示した（いずれの時点も $P=0.048$ ）。試験終了時点におけるチペピジン群の寛解率および治療奏効率

（53.6%および100%）は、プラセボ群（25.0%および75%）に比べ有意に高かった（それぞれ $P=0.029$ および $0.005$ ）。チペピジン群患者の寛解および奏効に要する期間も、プラセボ群に比べ短かった（ログランク検定：それぞれ $P=0.020$ および $0.004$ ）。ベースラインのパラメータおよび副作用の頻度に有意な群間差はみられなかった。【結論】チペピジンとシタロプラムとの併用療法は、MDD患者の症状をより短い治療期間で効果的に改善できる。ただし、今回の知見を裏づけるには、今回よりも多くの症例を対象に、より長期の治療を行う追跡試験がさらに必要である。